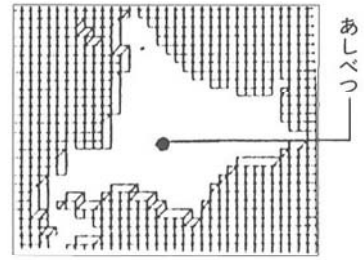


連載



あのマチ このムラ ・ 地域おこし活躍中

芦別市の事例

当研究所は開設以来、各市町村の地域振興計画づくりのお手伝いをさせていただいてきました。農業を取り巻く環境が年々厳しさを増していくなかで、本年も全道各地から計画づくりの要望をお受けし大学や諸研究機関のご協力を得ながら精力的に取り組んでいます。本号から、これらの振興計画取り組みの過程で、目に触れたり、心で感じた事柄を現地の皆様や担当の研究者が一口レポートでお伝えします。それぞれの地域の取り組みに些かなりとも参考になってほしいとの願いを込めています。

第一回目は、**星の降る里・空知管内芦別市**からの報告です。

次号以降はさらに中身を充実させていく心づもりです。

(編集部)

地域の概要

(一) 面積と土地利用

総面積八六五㎢と道内自治体のなかで七位の広さを有するが、うち八九％は山林である。農地総計は三七五〇㍓で、二六〇三㍓が水田、七〇三㍓が普通畑、四四三㍓が牧草地である。水田率が高く水稲が基幹作物となっている(92年)。

(二) 人口、農家戸数

農業就業人口

市の人口は、一九九〇年現在二五、〇七八人である。最高時は、

一九五八年の七五、四五二人であったが、炭鉱の縮小、閉山で現在の規模に至る。年齢別構成では、六〇歳以上層が二五・六％を占め高齢化が進んでいる。

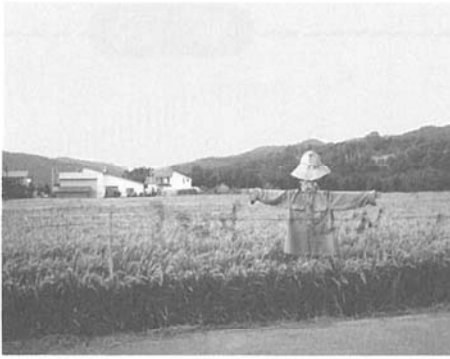
市内農家戸数は七〇九戸(うち専業農家二二三戸、第一種兼業農家二七七戸)で、一戸当たり経営耕地面積は五・四㍓となる。市内農業就業者は一四〇六人だが、六〇歳以上が六〇四人(四一・八％)と、高齢化がかなり進行している。

(三) 農業の位置

農業就業者数は、全産業就業者数一一、四九三人の一・二％を占め、全道の七・九％を上回る。生産農業所得は一七億四千万円で、一戸当たり所得は二、四五一千元(全道平均四、五六六千元)と高くないが、一〇㍓当たり所得は四万六千元(全道平均三万四千元)とかなり高い。

主要農産物の生産状況

図のとおり、作付面積、生産量とも水稲が圧倒的多数を占める。



転作部門では、かぼちゃ、メロンの作付が多い。最近では花きを導入する農家が増えてきた（現在三〇戸程度）。市北部の新城地区は畑作地帯であり、ここではばれいしょの作付が目立つ。畜産部門では乳牛、採卵鶏の飼養頭羽数が多い。京都生協との産直取引が全国的に注目されている。主要取引作物は、米（年間約二万俵）、メロン（三〇〇〇ケース）、ばれいしょ（三〇〇〇ト）、芦別市畜産公社で生産される肉牛（三三〇頭）などである。

◀ 特別表示米の生育状況

振興計画の主要課題

— 新農政を考慮した

農業振興計画の策定—

計画が目指す将来像

一戸当たり農業所得の向上をまず第一に考えていく。具体的には米プラスα（野菜、花きなど）の複合経営の確立、野菜主体農家の存立条件などを検討していく。そのほか、京都生協とのより発展的な産直取引の方法、炭鉱閉山後の兼業農家の将来方向、山間地における農地問題なども検討していく。

地域の活性化事例の紹介

芦別市常磐在住のY氏は三二歳の芦別市農協青年部長。

四・四の耕地に米、花き、かぼちゃを作付している。農作業はY氏、妻、母親、雇用一名の計四名でまかなっている。

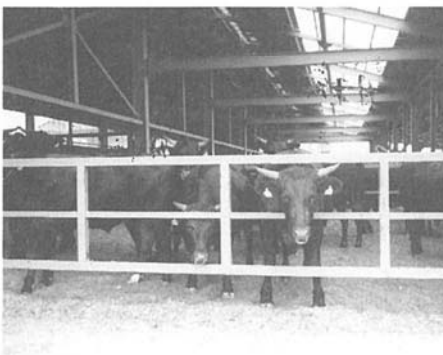
一九八七年まで炭鉱労働に従事していたが、閉山により兼業先を失い、新たな収入源の必要に迫ら

れる。「農業で生計をたてていけないか」と思っていた矢先、雨竜町で花を生産している拓殖短大の先輩宅を訪問。「これは儲かるかもしれない」と直感し、翌年カスミソウとスターチスを導入した。普及所からの情報収集、育苗ハウスの改良（花きにも利用するため）などといった懸命な経営努力を積み重ね、今では花だけで三〇〇万円の所得を得るようになる。

芦別主要農畜産物の生産状況（1992年）

〈耕種〉		作付面積	生産量	作付面積	生産量
水 稲	1,810 ha	8,440 t	かぼちゃ	108 ha	1,560 t
小 麦	137	164	ばれいしょ	94	2,830
小 豆	24	53	メロン	27	661
大 豆	100	168	食用ゆり	16	208
〈畜産〉		頭 羽 数		頭 羽 数	
乳 牛	910		豚	650	
肉 牛	340		採卵鶏	2,037	

（企業有16万羽を除く）



◀ 芦別市畜産公社の肉牛飼育

当研究所との現地検討会では、「後継者確保のため、魅力ある職場、つくりを心がけていくべき」と主張。常日頃から芦別市農業の将来を考えている姿勢を感じさせた。芦別市を代表する若手農業経営者である。

（レポーター

地域農業研究所 研究員

井上 誠司）